

2026年1月4日 市川福音キリスト教会（イザヤ40章28～31節 #471）

目標めざして

Iコリント9章24～27節

はじめに

新年明けましておめでとうございます。昨年末には、「私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隸になりました。」というパウロの生き方の真骨頂を学びました。

パウロ自身は律法を守る人でありながら、だれに対しても、何に対しても自由な人でした。しかし、律法の下にある人には律法の下にある人のようになり、異邦人には異邦人のようになり、弱い人には弱い人のようになりました。8～10章では偶像に捧げた肉について、信仰の知識が十分でなく、弱い人に配慮すべきことを語っていますから、弱い人には弱い人のように、に焦点があります。それは「何とかして、何人かでも救うため」であり、「福音の恵みをともに受ける者となる」ためでした。私たちもそうありたいと願いつつ、今日もこれに続くところを学びましょう。

1、「競技場で走る」（24節）

24節「競技場で走る人たちはみな走っても、賞を受けるのは一人だけだということを、あなたがたは知らないのですか。ですから、あなたがたも賞を得られるように走りなさい。」

今年の箱根駅伝も青山学院大学は強かったです。大会新記録更新での優勝、大したものでした。「競技場で走る」「賞を得られるように走りなさい」とすると、昨日の今日のことですから、自然に箱根駅伝が思い浮かびます。

同じようにパウロは、コリントをはじめギリシアの教会に語りかけるとき、スポーツ競技のことを思い浮かべずにはおれませんでした。というのは、アテネもコリントも古代のスポーツ競技の中心地だったからです。マラソンの起源は、紀元前490年のマラトンの戦いでペルシャに勝利したことをアテネ伝えた使者であるとされます。ペロポネソス半島の西岸オリンピアでは、記録に残るだけでも紀元前776年から4年に一度の競技会が開かれていました。競技場はスタディオン、スタジアムのツールです。

そして、コリントではイストミア競技会が2年に一度、大々的に行われていました。イストモスは競技の開催地であるコリント地峡の古代の呼び名です。競争があり、幅跳び、円盤投げ、レスリング、拳闘などもありました。

パウロはコリントに1年半滞在しましたから、この競技会について知っていましたし、あるいは実際に観戦したかもしれません。

パウロはピリピ人への手紙やテサロニケ人への手紙など、ギリシアの教会に宛てた手紙において「苦闘」という言葉を頻繁に使っていますが、これは競技に使われる言葉です。イエス・キリストはたとえを巧みに用いましたが、競技のたとえはありません。パウロが競技のたとえを多用するのは、ギリシア人はギリシア人のようになっていることを示しています。

現代では、金銀銅メダル、8位入賞とか、章も各種ありますが、当時は賞を得るのは一人だけでした。晩年のパウロは殉教を予感しながら、IIテモテ4章7節でこう語ります。「私は勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。あとは義の栄冠が私のために用意されているだけです」。このようにパウロは生涯にわたって信仰の人生を競技と重ねています。

ヘブル書はパウロのものかどうかは明確でないヘブル人への手紙ですが、12章1~2節は競技のたとえでこう語りかけます。「私たちも、一切の重荷とまとわりつく罪を捨てて、自分の前に置かれている競争を、忍耐をもって走り続けようではありませんか」。ローマ世界にディアスボラとして広がるユダヤ人にとっても競技は身近なたとえだったのです。

2、 競技をする人の節制（25節）

25節「競技をする人は、あらゆることについて節制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。」

古代オリンピックで優勝者に与えられたのはオリーブの冠でした。月桂冠という説もあります。イストニア競技会の冠は松ですが、当初はセロリとかパセリだったとも言われます。どれも香りのある生きた枝や葉です。

しかし、これらはまさに朽ちる冠です。

ヤコブ1章12節には「試練に耐える人は幸いです。耐え抜いた人は、神を愛する者たちに約束された、いのちの冠を受けるからです」とありますが、これなどは、香り高い生き活きとした、それでいて永続する冠を連想させます。

Iペテロ5章4節には、「大牧者が現れるときに、あなたがたはしづむことのない栄光の冠をいただくことになります」とあります。

競技者は朽ちる冠のためにさえ、大変な節制をするわけです。食事に気を配り、規則正しい生活をし、暴飲暴食を避け、しかも肉体と精神の訓練を怠りません。パウロは、だから朽ちない冠のためには、どれだけ節制してもし過ぎる

ことはないと言うのです。

3、目標をはっきりさせる（26節）

26節「ですから、私は目標がはっきりしないような走り方はしません。空を打つような拳闘もしません。」

ピリピ3章14節「キリスト・イエスにあって神が上に召してくださるという、その賞をいただくために、目標をめざして走っているのです」

「賞を受けるのは一人だけだ」と言ったパウロですが、ここでは競争のことを言っているのではなく、自分自身との格闘という意味で、すべてのクリスチヤンが目標である賞をめざして走り闘うことが勧められています。

ヘブル6章11～12節には次のようにあります。

「私たちが切望するのは、あなたがた一人ひとりが同じ熱心さを示して、最後まで私たちの希望について十分な確信を持ち続け、その結果、怠け者とならずに、信仰と忍耐によって約束のものを受け継ぐ人たちに倣う者となることです。」

4、自分が失格しないため（27節）

今日のところで、競争相手がある競技の話題から語り始めたパウロですが、最後のところではもう競争も競争相手もありません。視野の中にあるのは、ただ目標としてゴールと栄冠だけ、そして自分自身です。

27節「むしろ、私は自分のからだを打ちたたいて服従させます。ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者にならないようにするためです。」

パウロはすでに23節でこう言っていました。「私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みをともに受ける者となるためです」。同じことですね。「福音の恵みをともに受ける」ためには「自分が失格者にならないようにする」必要があります。

パウロの競争、拳闘の最終的な相手は自分自身でした。「打ちたたいて」は文字通りパンチがさく裂することを表す言葉です。「服従させます」は、奴隸として酷使するという意味です。パウロは、誰か人に対してではなく、あくまでも自分との戦いをしているのです。

先ほどのピリピ3章14節を、13節から読んでみるとこうです。「兄弟たち、私は、自分がすでに捕らえたなどと考えてはいません。ただ一つのこと、すなわち、うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、キリスト・

イエスにあって神が上に召してくださるという、その賞をいただくために、目標をめざして走っているのです。」

パウロは弟子であるテモテにもこのようにアドバイスします。I テモテ 4 章 16 節「自分自身にも、教えることにも、よく気をつけなさい。働きをあくまでも続けなさい。そうすれば、自分自身と、あなたの教えを聞く人たちとを、救うことになるのです。」

おわりに

罪という言葉の一つの原語はハマルティア、的外れです。的外れな人生から方向を変えて、回心して神のみ心に沿って神に向かう生き方を始めた私たちです。人生の舞台をスタジアム競技場に見立てて、雲のように取り巻く証人たちの励ましを受けながら、いのちの冠、義の栄冠、朽ちない冠をめざして走ってまいりましょう。